俳句的人生

二〇二二年十一月八日（火）

熊本シニアネット俳山文化祭

句集『太陽の門』から

はじめに

咲きみちて空にやすらふ桜かな
さまざまの月みてきしがけふの月

皮膚癌

死の種子の一つほぐるる朝寝かな
死神の我をうかがふ朝寝かな
春昼の死神に顔あらざりき

さみだれや人体青く発光す
いまひらく百合の射程に我はあり
摘出の一太刀浴びつ昼寝覚
真白な骨ちらばれり昼寝覚
森閑とわが身に一つ蟻地獄
振り返りみれば巨大な蟻地獄
病巣は柘榴裂けたるごとくあり
朝寒やあざ笑ふやに手術痕
鬼の口縫うてすさまじ手術痕
寸々と刻まるる身を秋の風
いくばくの肉奪はれてけふの月

西行の年まではと思ふ桜かな
白桃や命はるかと思ひしに
大宇宙の沈黙をきく冬木あり
天地微動一輪の梅ひらくとき
虹忽と無意識にして美しき
生き死にのしんと目高の鉢の中

コロナ

夏富士や大空高く沈黙す

福島

何もかも奪はれてゐる桜かな
福島をかの日見捨てき雪へ雪

広島

夏空の天使ピカリと炸裂す
アメリカの男根そびゆキノコ雲
朝顔や川煮ゆるとは何事ぞ
夏草といふ夏草の沈黙す
原爆忌写真に今も一家族
釦の数記憶の数や冬深し

沖縄

秋風や生死を分けし洞二つ
行きながら蛆に食はるる老女かな
戦争を嗤ふ無数の蛆清らか
戦争の刻まれてゐる裸かな
妻一人守りえざりし裸かな